thick. Peridial layer of head composed of slender hyphae and one layer of palisade-like row of cells. Central core of head composed of dense slender hyphae. Perithecia wholly immersed, globose, immature.

私がタイプ標本で見た限りでは未熟であり，被子器は頭部の組織内に沈在していた。Mains はその後に北米で採られた標本により委しい記載を残している。それによれば子実体が発生の年には未熟のままで残り，翌年に被子器は皮層を貫いて孔口を露出する。そのために未熟品が多いのだと説明している。あり得ることと思う。頭部の皮層は柄のそれと連結し，同一構造であるという。私は一層の柵状層を認めたが，120年前の古い標本の極めて小さな断片を切断したものであるから，未確認のものとして置く。

□石川県教育委員会（発行）: **手取川流域の手取統珪化木産地調査報告書** 301 pp. 117 pls. 11 maps., 1978, 3. 石川県の手取統は，日本の初期のフロラとしても，地質調査の実施の面からも，また珪化木として *Xenoxylon latiporosum* の株が存在する点からも重要な地点であった。それが発電を主とした多目的ダム建設のために，一部の天然記念物としての化石壁が水没するために行われた，広汎囲の調査研究である。この地域の化石が日本としては基準的なものであると共に，それらを逐一比較して報告したものである点からも，まことに貴重な報告である。三年前に，はじめて長枝と短枝とが葉片に附属することが発見されて *Nilssoniocladus nipponensis* となったものなども，再び述べられていて大いに注目を惹く。またイチョウに似た *Adiantopteris* の化石に，二葉対生，三葉輪生がある（fig. iv, 25-b, pl. 30-3 など）など，まことに割目に価するものがあり（私はこれとオハツキイチョウにみられる葉片分岐及び，4裂した筒状葉と関連があると考えるのだが，これは別に論じる予定），まことに意義の深い出版物である。ただ惜しむらくは，章によって著者が異なり，同一書でありながら全く異なった発表形式をとったことは甚だまずい。ことに化石属及び種にすべて和名をつけたことはかまわないが，上記の珪化木，*Xenoxylon* に対してザイシツフメイ属としたなどは，少々奇をてらいすぎると考えるものである。 （前川文夫）

□山本四郎： **愛媛県産植物の種類** 217 pp. 1978, 12, 25. 愛媛植物研究会刊行。¥1500. 著者は長い間県内くまなく植物の調査を続けて来た人，今回その50年の成果をまとめた植物目録を出版された。内容はシダ植物と種子植物のすべてを分類順に配列したもので，各タクサごとに学名・和名，それに要領よく記載された産地，大まかな県下の分布，概略の標高，生育量，特殊なものは生育地，というような記事が付いており，帰化品や逸出品もたくさん挙がっている。最初のシダの部を見たところでは，実に抜け目なく，かつ無駄なく載録されており，学名の使い方などにもよく注意が払われ，誤植もほとんど見当たらない。この調子なら全巻安心して使える便利なリストであると思う。 （伊藤 洋）